

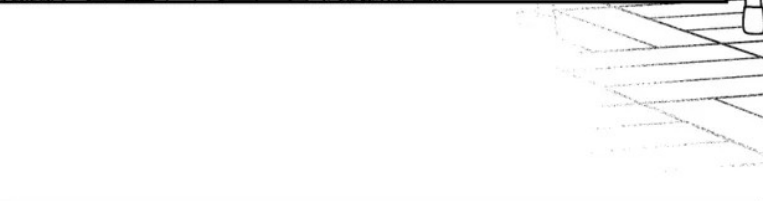
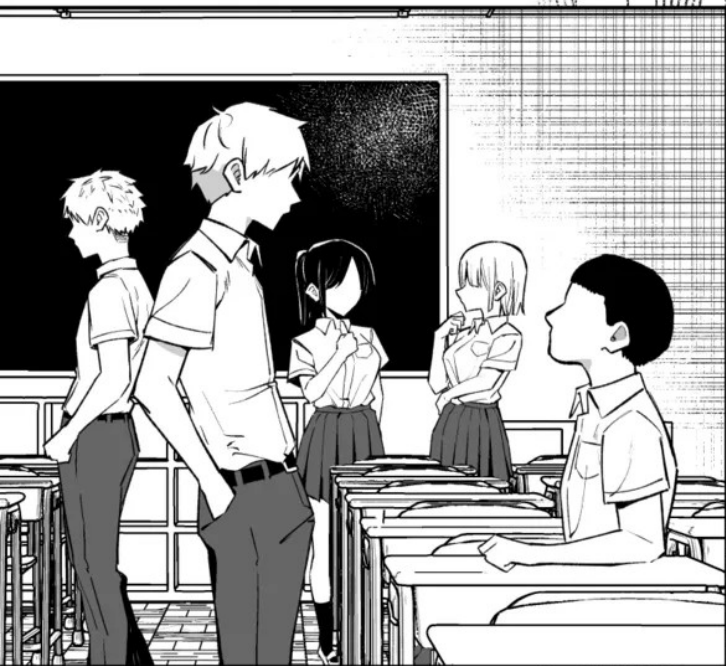


ちゅっ



なんだか最近、

視線を感じる。



気がするんだけど...



誰かに見られている...



舐めまわすような

そんな視線。



じゃあな！
凧人。

おー。

刺すような



…が、



あるような



凧人。



無いような…。

あれ？
俺、なんでここに…。



なんか気づいたら
いつの間にか...



珍しいね。



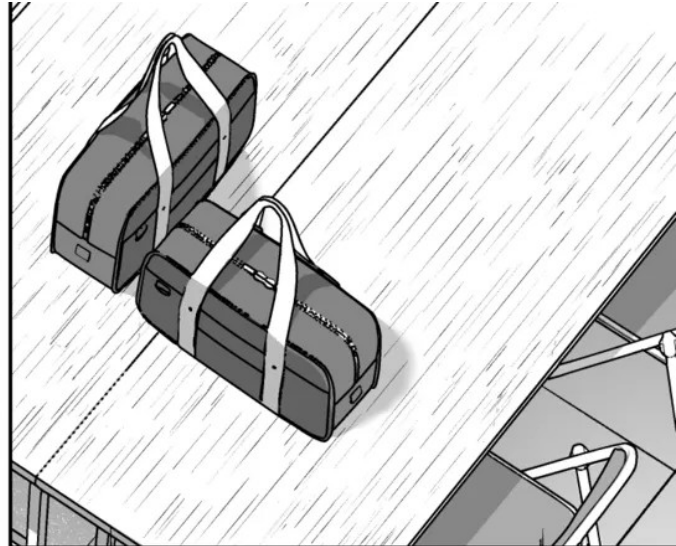
無意識に
来てしまったということとは、

自分から来るなんて。



キミもこの日常を
気に入っているということかな?









なんだこの状況。

クラスの
女のこの服を脱がせてる。

俺は今、



こんなに
可愛かったっけ…。

いや、元から可愛い
可愛いんだけど…。

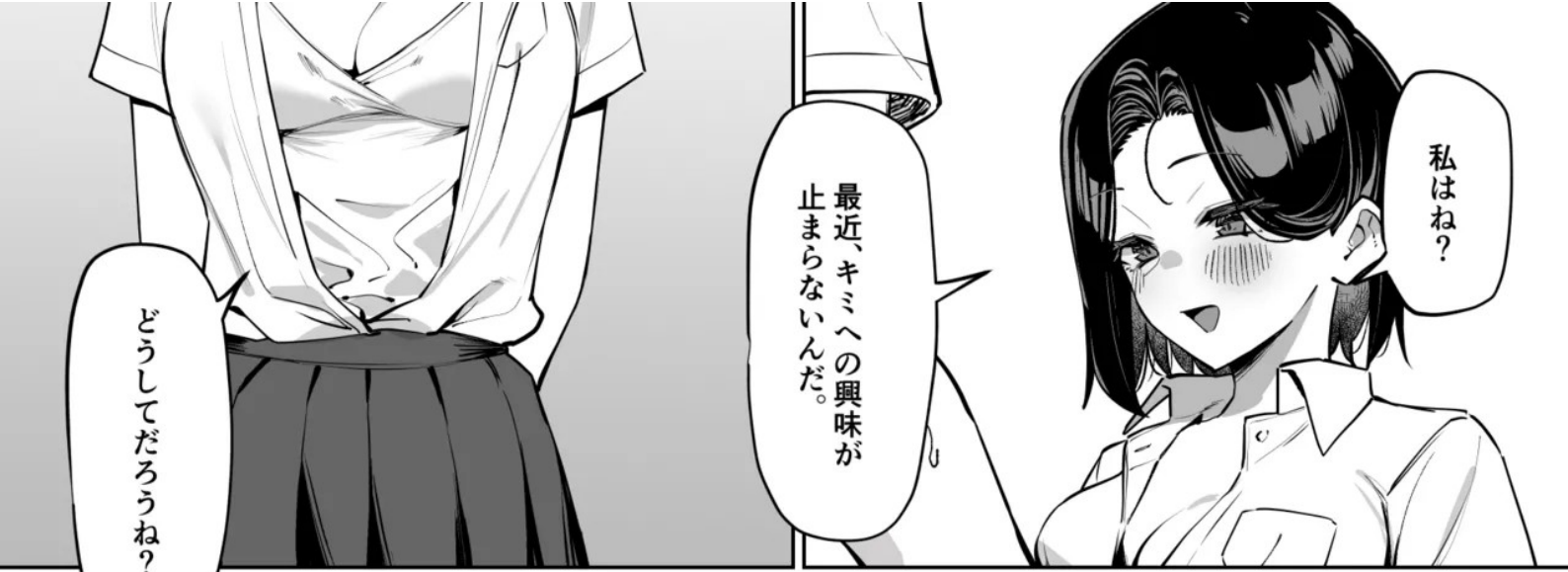


なんか茜の表情がいつもより
しおらしいというか、

普通の女子みたいなの…。



こらっつて、



どうしてだろうね?

最近、キミへの興味が止まらないんだ。

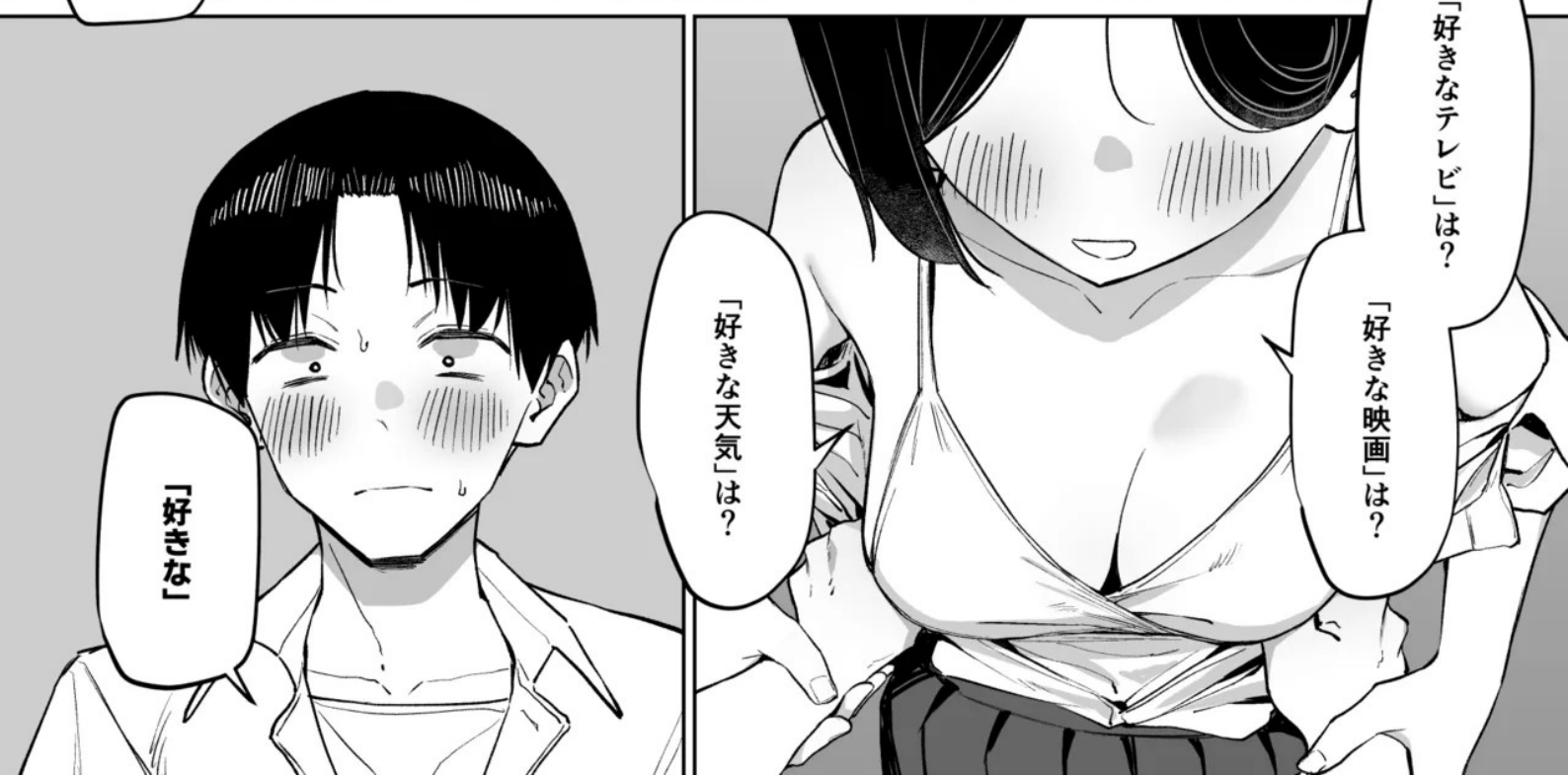
私
は
ね?



私は、意外とキミのことを知らないんだよ。

キミの手の感触は知っているのに、

キミの好きな食べ物は知らない。

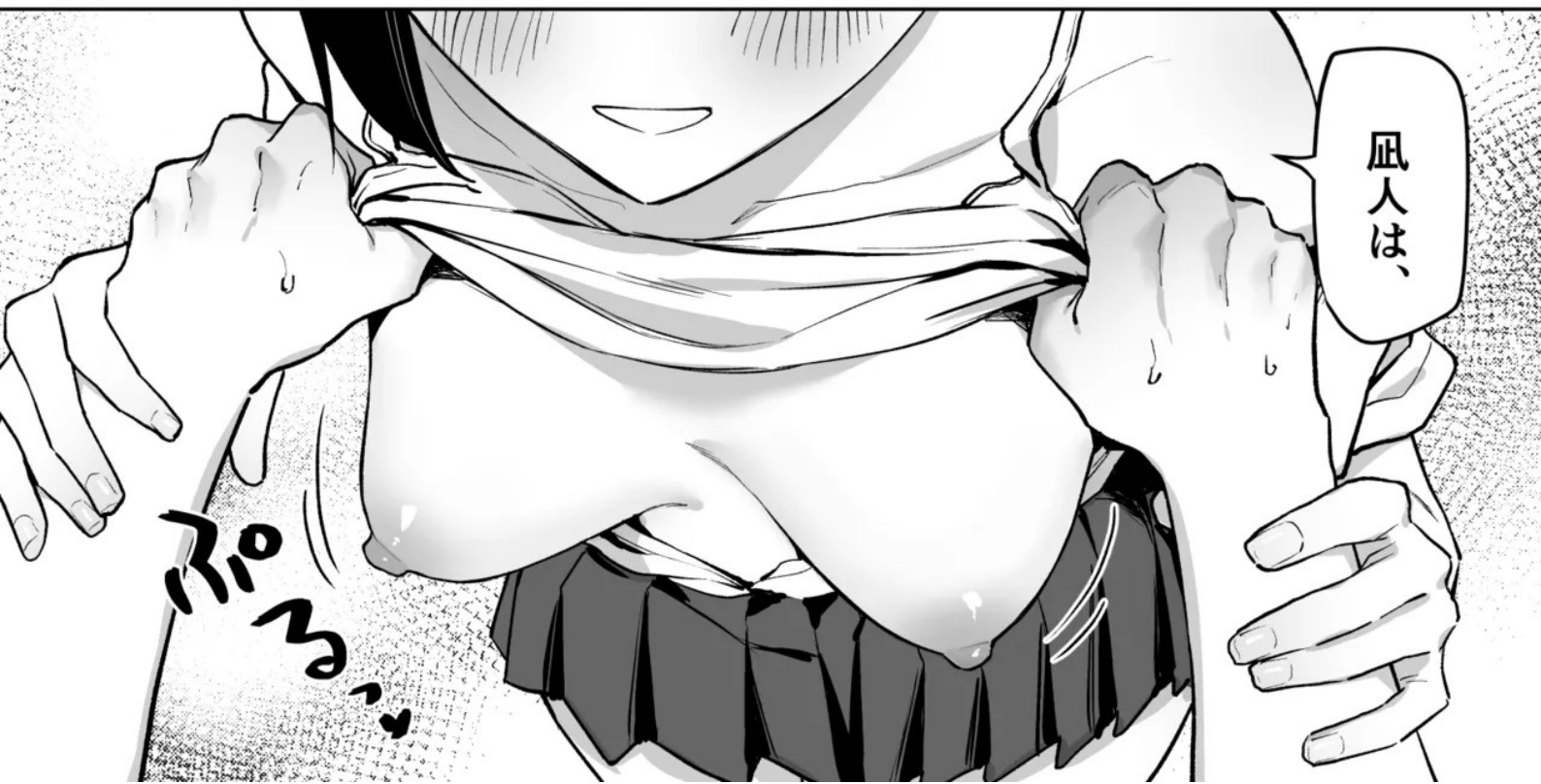


「好きな」

「好きな天気」は?

「好きな映画」は?

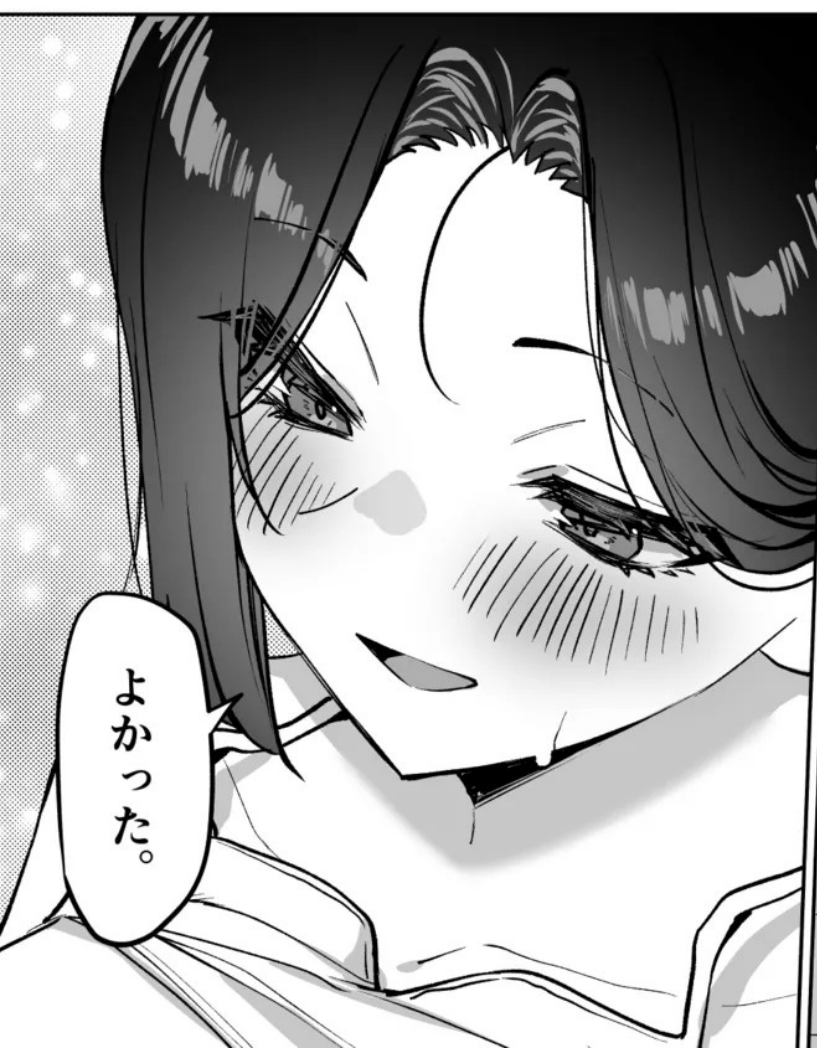
「好きなテレビ」は?





女のコが
こういうことしちゃうのは、

イヤ
嫌？

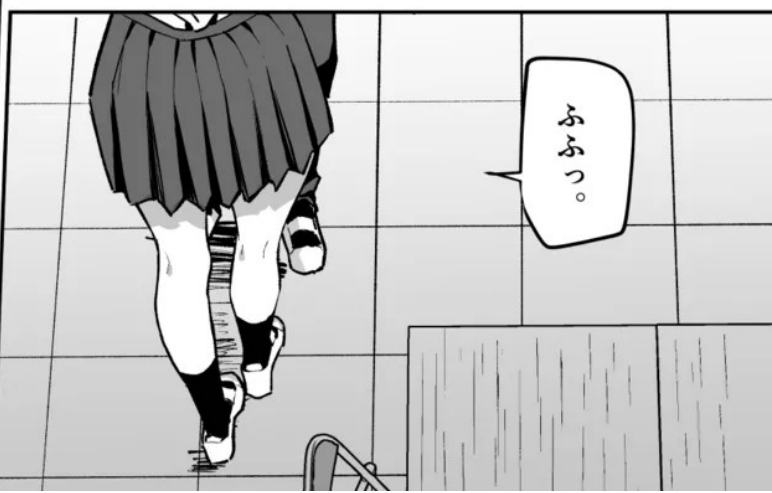


よかった。



い、嫌なわけ
あるか？

今さら。



ふふっ。







私は、

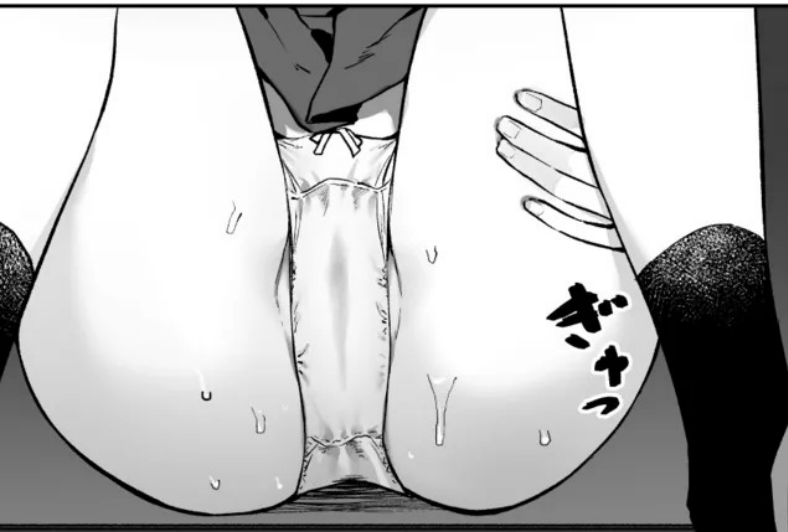
もっと凧人を知りたい。

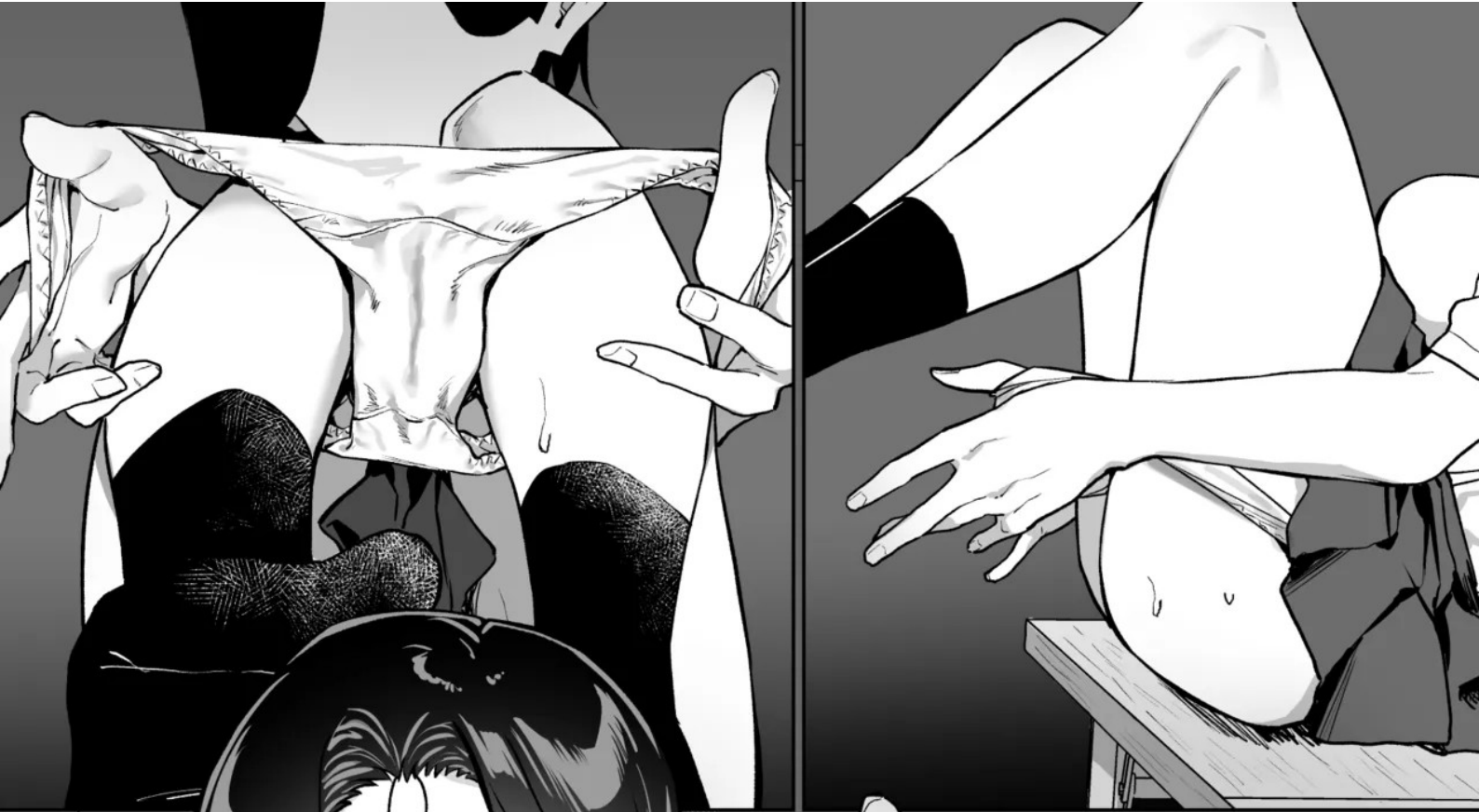
キミに



私を知ってほしい。

しちゃん





使って?

え?



ほのかに温かくて



それは、

はぁ

はぁ

はぁ



「性」の匂いがした。



どうしようもなく

スウウ



握りしめて



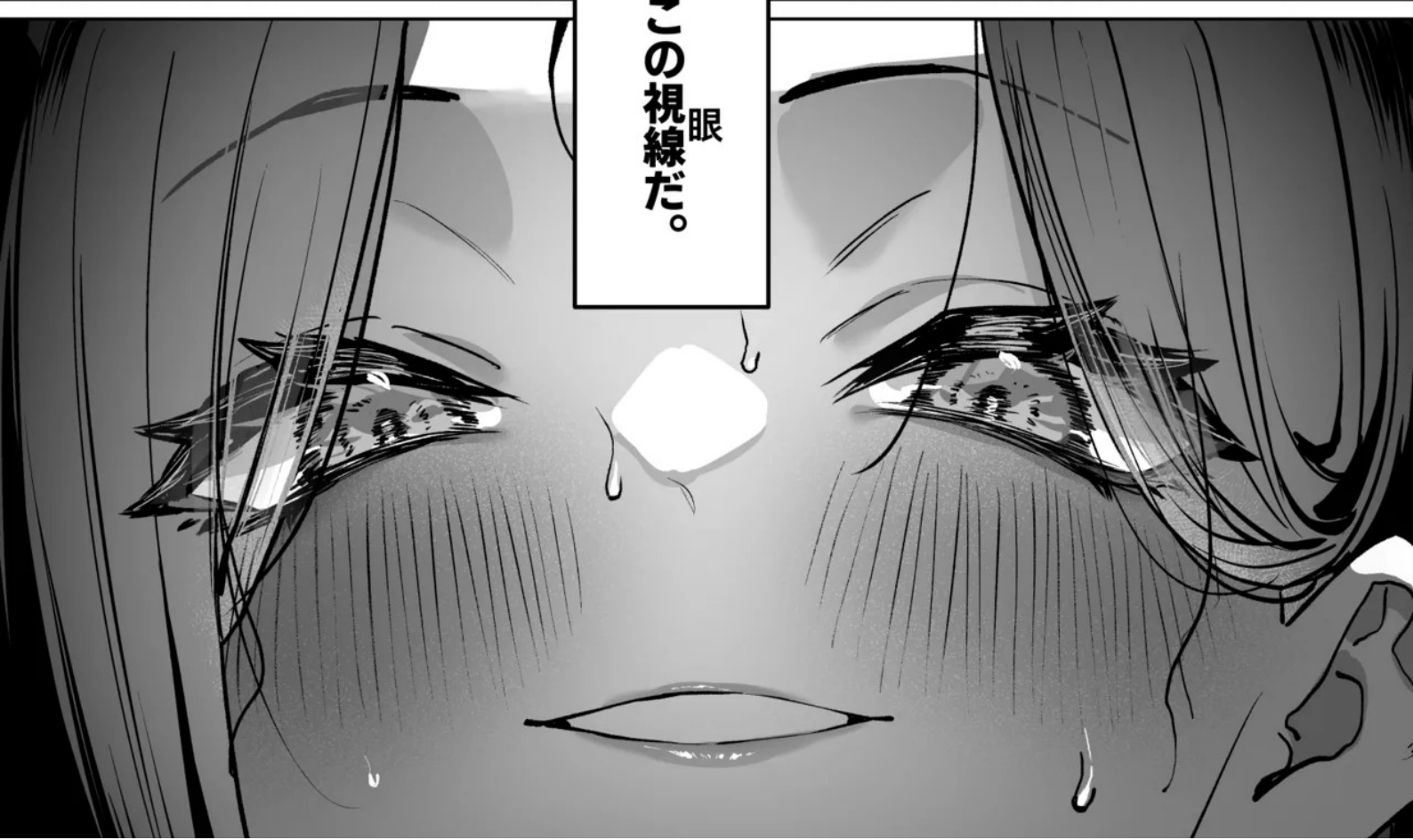
本当に私の下着を

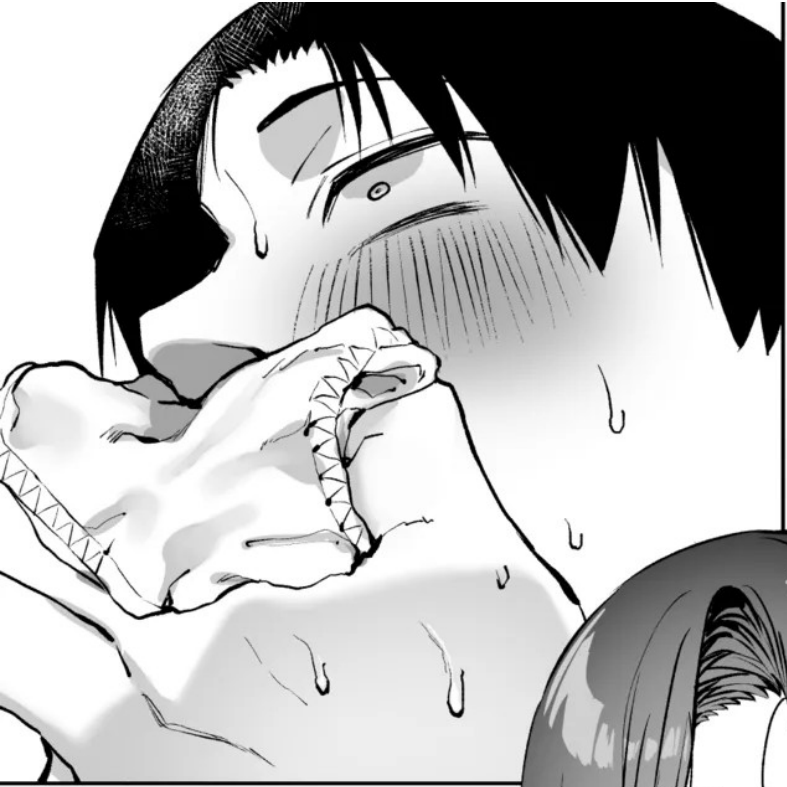
ああ、すごい。



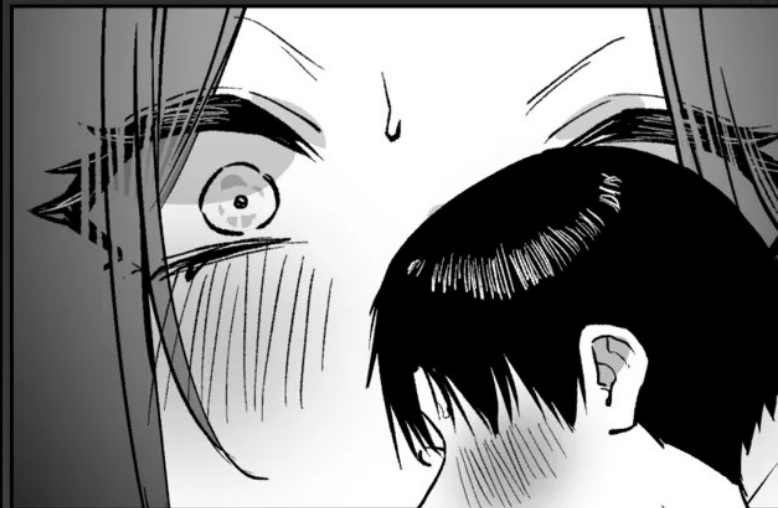
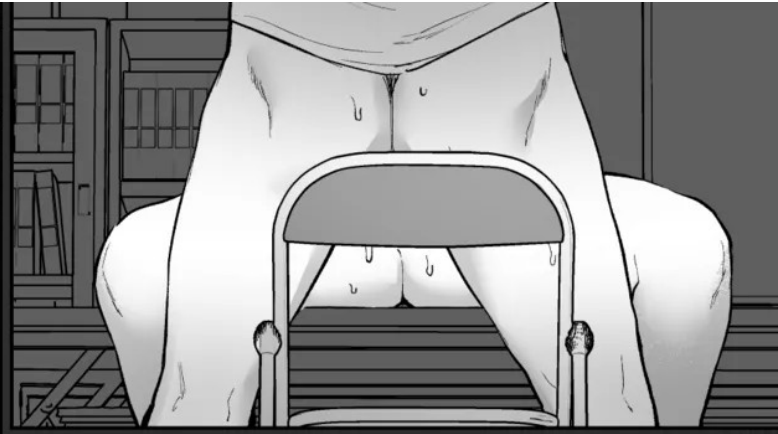
あ、分かった。

この視線だ。











どっつて……?



それで、

どうかな?



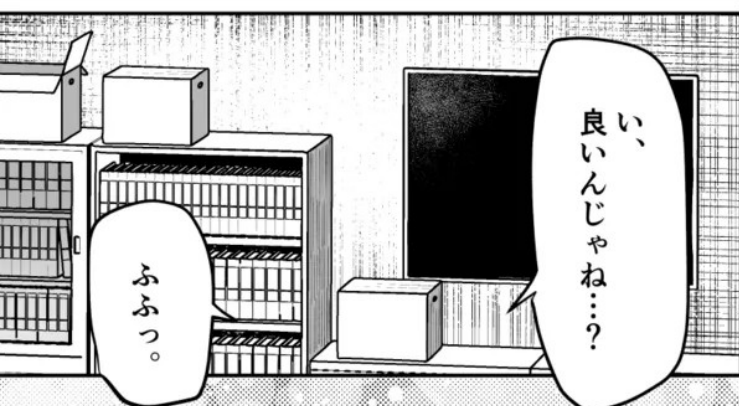
あー…、

提案だったんだ。



もっとお互いのことを
知っていききたいという

私の提案だよ。



いい、
良いんじゃないか…?

ふふっ。



じゃあ、手始めに
お互いの死生観でも
語り合おうか。

重すぎるだろ。

よかった♡